様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2020
課題番号：１５Ｋ０２７４６

研究課題名（和文）通訳者が持つ知見とノウハウのドイツ語教育への還元

研究課題名（英文）Using the knowledge and expertise of interpreters in German language learning

研究代表者
相澤　啓一（AIZAWA, Keiichi）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：８０１７５７１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：各分野で刻々と増え変化する日独両言語における専門用語に最も鋭敏に対応を迫られるのは日独通訳者たちである。彼らが収集するノウハウや語彙集は、しかしドイツ語教育の現場に還元される機会に乏しい。
本研究は、通訳者が個別に集めた日独専門用語を広く収集の上、整理・検証し、ネット上資料なども参考にしつつ、分野別の日独専門用語集を作成したものである。もとより分野も用語も無尽蔵のため網羅性を標榜することはできないが、日独間で通訳されることの多い代表的分野での重要なキーワードをカバーし必要な注を加えることにより、ドイツ語教育の現場や、通訳者以外のドイツ語学習者にも利用価値の使い専門用語集を提供した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ドイツ語の正書法導入（2002）以後も、大独和辞典に改訂・新刊の動きはなく、例えば教育制度やコロナについてドイツ語の報道や専門文献を読もうとするとき、信頼できる独和辞典が見つからないことは、ドイツを扱う各分野の日本語文献において誤解や誤訳が多い原因ともなっている。本研究は、独日両言語間で扱われる頻度の高いテーマを選んでテーマ別の専門用語集を作成し公開したことにより、単に訳語を見つける辞書としての利用のみならず、当該分野の議論を構成する重要用語を日独両言語で概観し、その分野の日独両言語における議論全体を速やかに理解するツールとして、多様な学術分野のニーズに応えることが期待できる。

研究成果の概要（英文）：German-Japanese interpreters have to deal with the constantly growing and changing terminology in both languages, which is not yet included in any German-Japanese dictionary. The know-how and vocabulary thus accumulated by them is hardly used in the teaching of German.
In this study, we listed the German-Japanese terminologies collected, researched, and translated by individual interpreters. We edited and sorted them thoroughly according to topics. This resulted in a glossary of German-Japanese terminology according to fields. Online resources were also taken into account. The glossary cannot claim to be complete, since the number of subject areas and terms is unlimited. It must be expanded continuously. However, by covering the most important keywords in representative subject areas where information is frequently exchanged between German and Japanese, we have created a glossary of terms that will also be useful in German classes and for students of German.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：日独専門用語辞典　通訳者養成　ドイツ語教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、日独通訳および通訳者養成のプロセスで蓄積されている知見を、とりわけ語彙を中心にして用語リストの形でドイツ語学習に還元するための具体的ルートを確立し、実際にネットなどに学習者がすぐに使える形で提供するものである。

私自身は一般的な大学におけるドイツ語教員とは異なり、以前、大臣折衝や学術会議などの日独同時・逐次通訳の現場を数多く経験し、外務省などでの通訳者養成教育にも携わってきたため、その経験から、すぐれた日独会議通訳者たちが日独両言語といかなる関わり方をしてどのように自ら語学力とスキルを磨くのかを学んできた。そうした視点からドイツ語教育の現場を見るたびに、ドイツ語教育というぬるま湯につかっているのではなく、私たち教員自らのドイツ語スキルを向上させることの必要性を痛感してきた。同時に、通訳という高度なコミュニケーションの現場と、初心者向け語学教育への特化傾向を強めるドイツ語教育の世界との間にほとんど接点がなく、日独通訳の現場でとびかう貴重かつ高度な言語知識が語学学習現場に還元されない状況を残念に思ってきた。そうした乖離を埋めるため、試行錯誤の末いきついたのが、私自身の専門研究からは些か傍流となる本プロジェクトである。

最先端の異文化間・言語交流を担うプロの会議通訳者は誰もが、通訳として仕事をするたびに、その日の会議テーマに関して両言語を対比した専門用語を数十～数百語収集して独自の用語集を作成するのを日課としている。そうして集められた貴重な用語の多くは、通常の独和辞典などに掲載されていない専門用語や最新の用語であり、場合によってはその場に居合わせる専門家のみが理解するような特殊語彙も含まれるが、それらの語彙全体で会議当日のテーマをカバーするものである。こうして作成される語彙資料は通常、当該通訳者個人のみの、その場限りの使用となるが、守秘義務に抵触しない一部の用語は、通訳者相互の間でやりとりし、互いに教えあったりして受け継がれてきた。こうして、大半のドイツ語教育関係者が与り知らぬところで、貴重な日独翻訳語彙がストックされてきたのである。とは言えそれらの用語集は、あくまで個人使用の覚え書きという性格が強く、学術的・体系的に集められているわけでもないため、そのままの形で他の人が使えるものではなく、個別の文脈や事例に依拠するケースも多いため、一般的に使用できる保証はない。そのため、そうした語彙集の原石はいかに貴重な情報を含んでいるといえ、ひとつひとつ取捨選択して検証・確認しなければ、語学教育の現場で有効なツールとしては使えない。日々無限に増える専門用語の数々を前に、こうした貴重な資料をベースとして分野別の日独専門用語集を編集する地道な作業の意味と必要性を痛感したことが、本研究の出発点である。

２．研究の目的

我が国のドイツ語教育はとかく初心者向けの教育に偏り、上級者をさらに確実なスキルに向けて育てることには手が及ばないことが多い。他方で、ちょっと高度なドイツ語テキストには、中・上級学習者が翻訳すると必ずといってよいほど同じように躓く誤読のパターンがいくつかあるが、誤読・誤解の一つの大きな要因は、独和辞書の不備、ないし、限界の多い独和辞典をうまく使いこなせない学習者が辞書の訳語に振り回されて文脈を読み取れないという現象にあるように思われる。上級レベルの語学力を持つ人材の減少は、日独間のコミュニケーションを英語に乗り換えようという動きにもつながる深刻な事態である。インターネットの普及などもあってか一般に辞書編纂は停滞している中、代表的な大独和辞典の更新もここ 20 年以上滞っており、アクチュアルなテーマについて新聞・雑誌の記事を読む上で信頼できる独和辞典・語彙集がなかなか見当たらない。そこで、上に述べたような通訳者たちが収集した語彙集をベースとして、信頼できる形に校閲した専門用語集を作成し、日本のドイツ語学習者やドイツの日本語学習者たちが広くアクセスできるようにすることが本プロジェクトの目的となった。

本プロジェクトは従って、日独両言語間での上級学習者や日独両言語を使用する各分野の専門家に利用してもらいたい成果を目指すものとなっている。その際、当初の計画では言語学習プロセスの分析や、発生しがちな誤解・誤謬の体系的な把握と分析なども視野に入れていたが、結果的にはそうした視点や認識は、専門用語集の個別記述の中にコメントなどの形で取り込む形で統合した。そうした例として、末尾に用語リストから、「教育」分野のなかの、ドイツの中等教育の教員を養成する「教員養成」分野のシートを末尾に付しておく。たとえば教員養成というテーマは、いずれにしても学校の先生を養成する話なので一見すると日独両国で同じような制度に見え、「教育実習」とか「教員免許」など、日常的に使用する用語を使って理解できるかのように考えがちであるが、実はこれほど日独で細部の制度設計が異なる分野も珍しく、したがって、この分野の文章の翻訳・理解は非常に難しい。どこに理解の難しさや誤解しやすい点があるかを、これまでの翻訳文献などを分析した上で必要に応じて説明し、誤解しやすいケースでは日本の制度に存在する語を（これまでよく使われる訳語が存在する場合でも）あえて訳語として同

一語は用いず、両者の相違に注意を促すといったことが本用語集の中では行われている。このように、本用語集は単に関連用語を並べただけのものではなく、当該分野のドイツ語・日本語の文章に接する際にその分野の理解が正しくできるための工夫をさまざまに詰めこんである。なじみのない分野に関する文章を読もうとする学習者にとっては、大いに役立ててもらえる情報文献になることと期待される。

３．研究の方法

研究の出発点にあったのは、私自身もしばしば同時通訳の仕事でご一緒させていただいたドイツ語通訳者が、現役時代に作成した 6 万語ほどの大きな日独用語集であった。その中には、文字通りかけがえのない貴重な用語や知見がふんだんに含まれていたが、同時に、そのときどきの会議のメモや覚え書き、時代と共に変化した内容など、多様なレベルの情報が含まれており、そのまま教育目的で利用することはできず、一つ一つの語についての多様な検証が必要であった。膨大なデータをもとに意味ある公開用データを作成するにあたっては、内容的にも、また使用メディアについても、さまざまなアプローチを試みたが、試行錯誤の末に行き着いたのは、専門用語集として分野別に編集するという方法であった。それは、個別の単語をすべてアルファベット順にならべるところまで文脈を解体してしまうのではなく、一定範囲の分野毎のまとまりの中で用語の布置・ネットワークを浮かび上がらせる形で各語に接するのが、個別の語と全体の文脈を往き来しながら言語と内容を有機的に学習する上で最も意味のある形であろうと結論づけられたからである。

本研究においては、そうした用語集作成に向けて、通訳・翻訳者をめざすドイツ語学習者および日本語が非常によくできるドイツ語母語話者たちに、定例勉強会などを通じてご協力いただいた。もともと私は日独通訳者養成に向けたそうしたボランティア活動を定期的に行なってきてきたが、これら参加者たちとの定期的学習の場において、学習者の方々が理解に苦しんだり誤訳したりするケースを分析することが、何が上級者向けドイツ語教育にとって必要なのかを分からせてくれる何よりの素材となった。さらには、在独の日本大使館・総領事館職員から直接いただいたレクチャーをもとに、省庁・外務省関連の肩書き・名称などをリストアップするような研修機会も設けることもできた。そうした折々に得られた用語や認識が、ベースとなった用語集に関する単語や訳語を超えてさらに膨大に集まって、現時点での用語集を作り出している。研修会での気づきは、注意事項としてのコメントとして本用語集においてもふんだんに活かされている。むろん、彼ら学習者たちはいずれもかなりのドイツ語力・日本語力の持ち主であるため、本用語集作成に向けて、その趣旨をよく理解してご協力いただくことができた。それは、毎回の勉強会などでの語彙のまとめ作業のみならず、最終的に各分野毎の用語のとりまとめ作業における直接的な貢献にまでいたっている。これら数多くの研修や討論の場を通して、一つ一つの訳語を検証・精査し、テーマ別にリスト化する作業を続けたことは、参加メンバーたちにとっても貴重なプロセスとなったことであろう。

４．研究成果

本研究の成果は、論文ではなく、日独専門用語集という、多くの人が広く使用できる共有の知的財産の形としてオンライン公開した。本プロジェクトは終わりのないプロジェクトであり、現状リストには無論さまざまな修正が必要な箇所が存在するだろうし、今後さらに収集すべき用語・分野は無尽蔵である。今回公開した分中で最も新しい分野は「コロナ」関連用語であるが、以前から日独国際会議でしばしば扱われてきたテーマ、例えば温暖化や少子高齢化といったアクチュアルな分野においても、会議のたびに新たな重要な概念や法律や付け加わるのが常である。分野毎にリストの完成度もかなり異なっており、新たな作業はどの分野についても無尽蔵に発生するのが実態であるため、ここで作業が終わるのではなく今後も恒常的な更新が不可欠である。科研プロジェクト終了時点で公開したのは 20 分野、今少し精査を加えて近いうちに公開できそうなのがさらに 10 分野ほどである（1 分野あたり平均すると 600～700 語程度）が、今後もこれまで同様の作業を継続する予定である。

今回は PDF ファイルの形で現時点での分野別専門用語集を取りまとめて成果提出を行ったが、その意味で、今後、多くの賛同者・協力者・通訳者が共同で運用し、現リストをさらに更新・発展していけるようなオンラインサイトでの運用をおこなう予定である。それにより、日独の知的公共財として多くの関係者に利用してもらいつつ、更新を進めていける体制を構築してゆきたい。幸い、私が本プロジェクト終了後に在籍しているケルンの日本文化会館は、このデータベースの公的価値を評価してＨＰでの発信と協力を約束してくれているので、日独の利用者にも開かれた形で末永く利用されてゆくものと期待する。

（以下、例示のための参考資料：「教員養成」関連の単語リストページ）

f	Wissenschaft	学問		大学（理念）	
	教員養成				
n	Amt des Studienrats	普通教育学校上級教育職	D	教員養成	
f,m	Anwärter*in	教員候補生	D	教員養成	Vgl: Lehramtanwärter*in　教員養成課程第二段階で実習する人たちのこと
f	Ausbildungsschule	実習校		教員養成	教育実習が行われる学校のこと
m	Ausbildungsunterricht	養成授業		教員養成	養成授業（Ausbildungsunterricht）とは、試補がその勤務する学校で行う授業のこと。指導下の授業と独立して行う授業がある（「試補勤務規定」第11条第3項を参照）。
f,m	Beamte[r] auf Widerruf	撤回権留保付官吏、試用公務員	D	教員養成	Referandarなど、本採用前の地位にある公務員。「この類型は、常に公的使用者の裁量に基づき免職されうるのが原則である（連邦官吏法37 条1 項、官吏地位法23 条4 項1文）」
n	Berufsfeldpraktikum	職業領域実習	D	教員養成	学士課程の学生がSchule以外の場所で4週間程度、通常、第 4 または第 5 ゼメスターで行う（ノルトライン・ヴェストファーレン州）。（Schuleで行う学士課程の実習はEignungs- und Orientierungspraktikum）
n	Berufskolleg	職業コレーク（NRWにおける職業教育学校の総称）	D	教員養成	
f	Bescheinigung	試験成績証明書		教員養成	試験局は、合格した第一次試験については合格証（Zeugnis）を、不合格となった第一次国家試験については行われた各試験成績に関する試験成績証明書（Bescheinigung）を発行する。
n	Beurteilen	評価（すること）	D	教員養成	Standards für die Lehrerbildung: Bildungswissenschaften（2004）で定められた教員の4つの主要Kompetenzの一。適切で透明性の高いやりかたで生徒の能力を判断・評価すること。
pl	Bildungsstandards	教育スタンダード		教員養成	ある学年の生徒が学んで備えるべき能力・知識の指針
pl	Bildungswissenschaften	教育諸科学		教員養成	教育学、心理学、日本で言う教育原理など、教員養成に必要とされる教育学関連授業
f	Binnendifferenzierung in der Klasse	生徒の多様性に応じた形で授業を提供すること		教員養成	難度に差をつくることで、習熟度の異なる学習者それぞれに学習意欲が湧くような課題や練習問題を提供することができる。
f	dritte Phase der Lehrerbildung	教員教育の第三期	D	教員養成	教員として実務に当たっている時期は同時に、継続教育を受けるべき「教員教育の第三期」でもある、との考え方。正式な名称ではなく「いわゆる」付きで用いられる。
f	Durchlässigkeit	学修課程間の透過性（大学間の移動などが可能になるために）、移動可能性		教員養成	同時に内部での移動可能性（Durchlässigkeit）を高め，共通の基礎課程と補足の学修をつうじて，あるいは専門大学相当の学修課程を終えた後に，総合大学相当の学修課程に進むことができるように柔軟な接続がはかられた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 AIZAWA, Keiichi
２．発表標題 "Es gilt das gesprochene Wort" - Didaktische Anregungen aus dem Bereich der Dolmetscherausbildung
３．学会等名 KGDaF（韓国ドイツ語教育学会）17. internationales Symposium ”Muendlichkeit in der Fremdsprache"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 相澤　啓一
２．発表標題 ”Es gilt das gesprochene Wort” - Didaktische Anregungen aus dem Bereich der Dolmetscherausbildung
３．学会等名 Koreanische Gesellschaft fuer Deutsch als Fremdsprache　第17回総会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

整理前用語データ一覧 http://germanistik.jp/woerterbuch/woerterbuch.pdf ドイツでの日独通訳者養成セミナー http://www.germanistik.jp/dolmetschag/blockseminar(dt) 日独通訳者養成セミナー http://www.germanistik.jp/dolmetschag/ 日独専門用語集-PDF https://1drv.ms/u/s!Ao4ae5UzZ5VrgZ5Y_QM7yYNPNi8iXg?e=XEkSnf

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 　日独通訳者養成セミナー	開催年 2017年～2017年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			